

# 世界の国とわたしたち

忠内太郎 横須賀市立野比小学校

実践教科：総合的な学習の時間・50 時間

対象学年：3 学年 対象人数：33 名

## (1) 実践の目的

現在の日本の小学生に、自分たちが生活している環境から限りなく遠く離れたアフリカという、世界の飢餓や貧困が集中している地域を想像させたり、学ばせたりするというのは、言うまでもなく非常に困難である。しかし、世界は日本をはじめ先進諸国だけで回っているのではなく、アフリカ地域に集中しているような発展途上国を含めた多種多様な国と地域が、綿密に関係し合っ

てこそ世界といえるのである。

我が国日本は、世界でも有数の輸入大国である。にもかかわらず、日常生活の中で、自分たちの生活を他の国や地域を含めた一つの世界としてとらえる機会は少なく、小学校教育の現場でもそれは同様である。だからこそ、小さな島国で平和の意味も曖昧なまま生きる日本人ではなく、色々な視点から自分たちの住む世界の本質を考えていける日本人を育てたいと思ったのである。今回の研修を通して、実際にはなかなか行けない、日本とは全くちがった遠い国を体験できるような授業をしたいと思った。そうすることで、文頭で挙げた問題点を導入の段階でクリアし、それをきっかけに普段とは少し違った視点で自分たちの住む世界について考えていけるような授業実践を行うことにした。

## (2) 授業の構成案

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1～20 限目 テーマ：世界の国・地図 調べ ねらい：日本を含め、世界の国と地域を知る	(1) インターネットや図書を使って、世界の国の名前、位置、食べ物、あいさつ等調べながら、白地図に色を塗る。 (2) 調べたことをグループでカードにまとめ発表する。	(1) 白地図、個人ノート  (2) 発表カード
21～24 限目 テーマ：ジンバブエの 友だち ねらい：ジンバブエについて学習し遠い国を身近に感じる	(1) 一枚の写真を見て、そこからどんなことが分かるかを考え、その写真がジンバブエかどうかを判断し、発表する。 (2) ジンバブエのサージョンケネディ小学校の授業風景 (VTR・写真) を見て、気づいたこと・感想を書く。	(1) 発表カード  (2) サージョンケネディ小学校での授業 VTR・写真、個人ノート  (3) サージョンケネディ

	<p>(3) サージョンケネディ小学校でのアンケート（自分たちが考えた）結果と自分たちのアンケート結果をくらべ、気づいたことを話し合う。</p> <p>(4) ジンバブエの料理サザを試食する。</p>	<p>小学校でのアンケート結果</p> <p>(4) サザの材料</p>
<p>25～32 限目</p> <p>テーマ：色々な地図</p> <p>ねらい：色々な地図について学習し、ハンガーマップの意味を考える。</p>	<p>(1) 今までとは違う珍しい世界地図を見て、どのように違うのか、なぜ違うのかを考え発表する。</p> <p>(2) ハンガーマップを見て、その意味について考え発表する。</p> <p>(3) ハンガーマップから分かったこと・考えたことを発表し、これからの学習計画を考える。</p>	<p>(1) 色々な世界地図、個人ノート</p> <p>(2) 発表カード</p> <p>(3) 個人ノート、学習計画用模造紙</p>
<p>33～36 限目</p> <p>テーマ：自分たちのくらしと世界</p> <p>ねらい：ハンガーマップをもとに考えたことを整理し、話し合う。</p>	<p>(1) ハンガーマップの授業を通して出た意見を、世界のことと、自分たちのくらしのことに分け整理する。</p> <p>(2) 前時に整理した意見をもとに、この先の学習で取り組んでいきたいことを話し合う。</p>	<p>(1) 個人ノート、学習計画用模造紙</p> <p>(2) 個人ノート、学習計画用模造紙</p>
<p>37～48 限目</p> <p>テーマ：給食のこしをへらそう計画</p> <p>ねらい：自分たちで考えた給食のこしという目標にどのようにしたら近づけるかを考え、それをもとに活動する。</p>	<p>(1) 給食のこしを減らすためにはどうしたらよいかを話し合い、発表する。</p> <p>(2) 給食のこしを減らすために、クラスやグループごとに決めた活動に取り組む。</p> <p>(3) 全校に向けて、給食のこしを減らすキャンペーンを行う。</p>	<p>(1) 個人ノート、学習計画用模造紙</p> <p>(2) ハンガーマップ、WPFの資料</p>
<p>49～50 限目</p> <p>テーマ：世界とわたしたち</p> <p>ねらい：自分と世界について考え、これまでの学習のまとめをする。</p>	<p>(1) これまでの学習の中で、感じたことや考えたことをもとに、作文を書く。</p>	<p>(1) 個人ノート</p>

### (3) 授業の詳細

3年生では、社会科の授業で「地図」について学習する。今年度は、4月当初から学区を探検し、四方位を確認しながら、地図作りに取り組み、クラス独自の大きな学区地図を完成させた。また、秋には三浦半島一周の社会科見学に出かけ、総合的な学習の時間を利用して、三浦半島の地図に体験を書き込んでいく学習も行った。その中で、多くの子どもたちが地図に対して強い興味を持っていることが分かってきた。

そこで、夏以降の総合的な学習では、日本地図や世界地図の地名・国名調べを行うことにした。6月頃から始めたインターネット活用のための「ローマ字入力」・「インターネットの使い方」の学習と平行しながら、インターネットや図書を利用し、都道府県名を調べては、日本列島の白地図に色を塗る学習を進めていった。その結果、その地方の言葉や食べ物、観光名所などについて発表し合う活動にまで発展した。

以上が単元に入る前の学習活動の流れである。

「世界の国とわたしたち」では、上記に述べた学習の流れをそのまま世界へつなげるところから始めた。日本列島の白地図を塗り終えた後、世界の白地図を用意し、今度は世界の地域、国名、食べ物、あいさつなどを中心に調べ学習を行った。調べられた国に色を塗り、定期的に発表会を開くという活動を20時間かけてじっくり行った。その中で、子どもたちは日本地図以上の興味を示し、積極的にその活動に取り組んでいった。その結果、小单元「世界の国・地図調べ」を終える頃には、多くの子どもたちが自分の興味を中心に、世界の地域や国の名前を覚え、得意げに話すようになっていた。





「ジンバブエの友だち」は、この大きな単元の本格的な導入にあたる小単元で、ここは単元目標に近づくために最も重要な部分だった。そのため、教師側からの教材提供もより意図的に行うことにした。そこで、今回の研修で得た教材が効果的にその役割を果たしてくれた。ジンバブエという国の文化や人々について考える活動を中心に、子どもたちは様々な写真に驚いたり、現地の子どもたちのVTRに釘付けになったり、メッセージやプレゼントの交換を行ったりした。それは、子どもたちにとって教師を通じた間接的なものではあるが、体験的な学習に近い活動となった。また、自作のアンケート結果などから、他の国と自分たちのくらしとの共通点や違いを知り、後の学習につながる多くの気づきや疑問をもつ子どもも出てきた。この学習活動を通して、子どもたちが遠い外国を一気に身近に感じ、世界に対する意識もより高まったという雰囲気が伝わってきた。



「色々な地図」では、その高まってきた世界に対する意識と、これまでの学習で得た知識をもとに、子どもたち自身が考える活動を多く取り入れた。JICA から借りてきた子どもたちが見たこともない珍しい地図を広げ、その地図の違いや目的を考えさせた。その中で、これまで積み重ねてきたジンバブエを中心とした世界の地域・国への関心や知識が、より子どもたちの考え方を広げ、それが次の「ハンガーマップのなぞをとく」という学習に上手くつながってくれた。そして、この部分がこの長い単元計画の大きな起点となった。

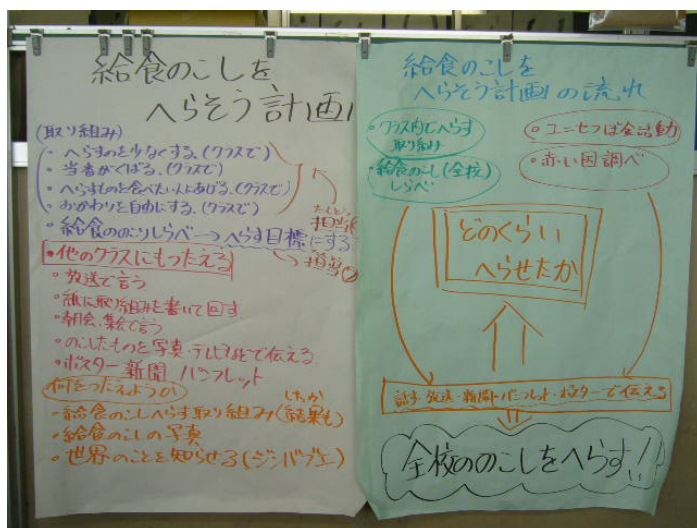
小単元「色々な地図」の中心においた「ハンガーマップのなぞをとく」という学習活動は、世界の飢餓問題について知るといふ難しい内容がテーマだった。世界の地域や国に対する知識、ジンバブエの友だち、地図の見方という3つの既習事項をもとに、大事な部分が隠された変わった色の地図（加工されたハンガーマップ）の意味を考えるという学習活動を行った。ジンバブエの真っ赤な色、平均寿命や、子どもの就学率といったヒントをもとに、子どもたちが一時間じっくり考えて世界の飢餓という現実について気がつき、考えるという授業を組み立てた。その中で、子どもたちはこちらが予想していた以上に、課題に対して意欲的に取り組み、たくさんの気づきの中から地図が表していることの意味にたどり着くことができた。そして、そこで子どもたちが考え、感じたことが次の学習活動への一歩となった。



「自分たちの暮らしと世界」は、クラスで話し合っただけで今後の学習計画を立てていくという小単元になった。これまでに感じたこと、考えたこと、気づいたことをみんなで出し合い、話し合った。その結果、色々出てきた意見を、世界のことと、自分たちの暮らしのことという二つに整理することができた。世界のことに分けられた中には、「赤い国の人を助けたい」「赤い国についてもっと調べたい」などの意見が多く出た。自分たちの暮らしのことの中では、「世界のことよりも自分たちの暮らしを見直す方が大事」「自分たちは恵まれている」「食べ物を捨てるのはよくない」などの意見が出た。その結果、その両方をつなぐことができ、かつ今の自分たちに出来ることという二つの条件に合う活動として「給食のこしをへらそう計画」という取り組みを立ち上げることに決まった。

「給食のこしをへらそう計画」は、当初の単元計画にはなく、教師側としても手探りの状態で進めることとなった。そのため、計画の本筋を決める話し合いにも多くの時間がかかった。しかし、その結果、子どもたちの何人かが、「食べられない人がいるのに、捨てるのはおかしい」や「赤い国を今すぐなくすことは出来ないかもしれないけど、何かやれることはないのか」「自分たちはこのままでいいのか」「食べ物をもっと大事にしたい」などの意見を出し始め、時間をかけて話し合っていた結果「赤い国をいつかなくすために、給食のこしを減らすことで、自分達の気持ちを変えていこう。」という意見にまとまった。これを主軸に、クラス一丸となつての学校の給食のこしを減らす活動が始まった。

これまでの自分たちが行ってきた学習内容と、新たに探し集めた資料（赤い国の現状や、学校の給食のこしの実態調査の結果など）を活用し、全校に自分たちの思いを届ける。現在、私のクラスでは、その目標に向けて、8つに分けられたグループがそれぞれ校内放送、朝会での発表、新聞、ポスター、パンフレット、クラス回りといった活動を通して、給食のこしを減らす一大キャンペーンを展開する準備をしている。



各はんの取りあひ  
「給食のこしをへらそう」

はん	取りあひ
1	新聞(中学年)
2	朝会で発表
3	放送・ポスター(低年)
4	チラシ(クラス回り)
5	新聞(低学年)
6	新聞(高学年)・ポスター(中)
7	パンフレット
8	ポスター(高)

以上が、実践授業の詳細である。この先は単元計画通りに進め、50時間という長い学習活動とその内容についての感想を作文という形にし、単元のまとめとする予定である。また、その作文での子どもたちの気持ちや考えを受け、自分自身の授業実践の最終的な振り返りを行い、次につなげていきたいと思う。

#### (4) 今後の課題について

以上のように、今回の研修をもとに50時間近い単元計画を立て、総合的な学習で「国際理解」をテーマとした事業実践に取り組んだ。その中で、今後の課題となったのは、やはり「国際理解」や「開発教育」を扱う難しさである。

今回の単元の流れは、子どもの興味に沿っているようでありながら、教師側から意図的に学習の方向付けをしてしまう場面が少なくなかった。特に前半は学習活動の中で出てくる熟語の意味が分からなかったり、資料を読み取ることが出来なかったりと、子どもの発達段階と授業内容との差を埋めるのに必死だった。そのため、徐々にその点に注意しながら資料を選んだり、子どもたちの気づきが出るまで時間をかけて理解させたり、授業内容のレベルを下げたりと、子どもに合わせた支援方法を考えることに重点をおくようにした。また、後半からは、できるだけ子どもの発想から次の活動を考えていくように心掛けるようにした。その結果、現在は上記の単元計画から少しそれ「校内の給食のこしをへらす」という子どもたち独自の活動を行っている。単元が始まった当初からそのような支援ができていれば、3年生での国際理解という難しい課題においても、より子どもたちに合った活動を展開できたかもしれないと今振り返っている。

それとは別に、明確な答えのない「国際理解」や「開発教育」をテーマにする場合は、ともすれば教師側の意見や考えの刷り込みにもなりかねないということも、毎回の授業を振り返る上で感じたことである。本来の単元目標を重視するあまり、凝り固まった教師の意見を子どもたちの自由な考えに植え付けるようなことになれば、本末転倒な結果となってしまう。そういう怖さを感じた。

以上のような反省を生かし、この先も小学校教育において「国際理解」「開発教育」という大きなテーマをもとに、「子どもたちに明日の世界のあり方について考えていってもらふ芽」を育てるような授業作りに取り組んでいきたい。